

2020年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2021/9/15

団体名	NPO法人フリースクール地球子屋	活動タイトル	不登校児の早期発見と総合的な支援による地域連携試行事業		
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景		
● 望ましい社会状況（ビジョン）	子どもを取り巻く状況は悪化しており、自己肯定感・自信がない子どもが追い詰められ孤立化し不登校となっている。小中学校は不登校を解決できず卒業させ学校種や年齢による制度の切れ目で苦しむ子ども・若者が増加している。その現状から子どもの人権・福祉が保障（生存・保護・育成・参加）され、子どもが安全・安心して育つことができる家庭環境となり、多様な教育環境からその子どもの力が発揮できるように自分の合ったものを選択できる社会をめざしている。		 <p data-bbox="2033 548 2214 688">スタッフ養成講座 参加者がWS型 相談で行うアイス ブレイクの様子</p>		
● 団体の社会的役割(ミッション)	子どもの人権・福祉の保障という価値観を保護者・家族に共有し不登校への理解を促し、不登校の子どもに対して多様な教育環境の実践に基づき切れ目のない支援を行い、一人ひとりの子どもの社会的自立を促す。そのために、1) 子育て支援事業（親の居場所としての親の会、不登校学習会、親子カウンセリング、訪問支援など）、2) 子どもの健康回復事業、3) 多様な教育実践事業、4) キャリア形成事業、5) 不登校やひきこもり支援機関との連携・協力・調査研究の5つの事業に取り組む。				
● 団体の活動基盤	不登校の子どもへの対応を身につけるプログラムを実践中だが家族との相談対応できる人材を育成する仕組み、プログラムを整備していく必要がある。不登校支援で必要な資源は学校文化とは対極的な多様な学習教材と年齢学年を超えた小集団である。教材の中でも製作プロジェクトは達成感と自信につながり実現のための道具やツールの充実が鍵となる。活動資金は会費、地域連携プロジェクト、多様な教育機会確保法を前提とした公的資金によってバランスよく成り立つ状態を理想としている。				
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)			
<p data-bbox="160 968 1089 1213">本事業は、家庭内で孤立し状態が悪化する不登校の子どもたちを、年齢や原因ではなく不登校になった期間ごとに3つ（6か月以内＝初期、6か月～1年未満＝中期、1年以上＝長期）に分け、連携支援を行った。相談への仕組みは、教育委員会、学校、病院などと連携が強化され、「ともに育つ親の会」「不登校学習会」を実施できた。初期の総合的な不登校支援として個別相談延べ146回。初回のみ相談は15.7%で継続相談が増えた事で初期中期子ども対象のWS型相談を選択する機会も増加した。他支援機関と連携できたことで健康状態、人間関係、特性への自己理解について状態が改善された。</p> <p data-bbox="160 1224 1089 1325">長期の子どもには、個別支援計画に基づき改善目標を細かく定め対応し子どもの体調や自信回復につながった。子どもの福祉教育に関わる事業はマンパワーが欠かせないためメンター11名、スタッフ2名を月2回育成し、8月末現在メンター8名スタッフ2名が育った。</p>		<p data-bbox="1107 968 2018 1436">不登校支援は、保護者の相談支援から始まるため相談への仕組みづくりとして教育委員会、学校、病院に訪問・電話連絡など行い強化された事で、「ともに育つ親の会」「不登校学習会」へ84人が参加し25人（30%）が相談につながった。不登校を期間に分けた総合的支援に取り組み、子どもの状態の改善が多くみられた初期相談では保護者に子どもの状態を総合的（健康、人間関係、子どもの特性）に評価し、2度目以降は生活行動やコミュニケーションの取り方を聞き取り状態の変化を確認した。目標とする月10人、年間100人以上はコロナ第5波の影響を受けたが概ね達成できた。相談の84%が継続しWS型相談を69回できてメンターや子ども同士の関係が構築できた。長期の子どもは10段階モデルに基づく個別支援目標を作成し、行動回数を記録したところ75%で行動変容が確認された。しかしコロナ第5波の影響により精神的不安定さや外出を怖がるなど状態が元に戻る傾向もあった。メンター11人、スタッフ2名を対象に月2回育成講座を開催し、不登校理解、コミュニケーションスキル、リラクゼーション法をトレーニングし、WS型相談に参加し子どもとの関係構築に役立った。</p>			<p data-bbox="2033 1062 2214 1272">個別支援計画に基づきコミュニケーションや協力的な姿勢を促しながらお菓子づくりをしている様子</p> 
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題		■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）	
<p data-bbox="160 1541 1089 1898">不登校の子ども支援は、子ども自身とご家族と両面から科学的根拠に基づいて粘り強く行っていく必要がある。不登校は一人ひとり原因も背景も異なり対応方法の標準化は困難であったが、1年目に作成した地球子屋流子育て術5段階20ステップをもとに現在の子どもの状態を評価していくことで子どもの状態が家族や支援機関に言語化され共有が可能になった。連携が進んだのは子どもをアセスメントするノウハウが確立したためである。2年目は、初期アセスメントをWS型相談に組み込み子どもから直接自分の状態を聞き出すことが一部の子どもからできた。6か月以内を初期としたが一部の子どもは健康回復を優先することから6か月から1年未満を中期までWS型相談を待つ必要性があることがわかった。初期アセスメントでWS型相談の提案時期の精度が上がった。10段階モデルは、具体的行動の改善を目標として改善を促した結果、状態は良くなっていくことが確認された。</p>		<p data-bbox="1107 1541 2018 1971">不登校の子どもは、最大限努力して学校へ適応を試みるものの、担任や級友に恵まれない、ネガティブな出来事が重なる、ストレスが多い環境であるなど様々な理由で学校へ行けなくなる。そこに本人の責任はほとんどないことが多い。自身もできるならば学校へ登校したい気持ちを持っている。しかし行けないため本人も辛い気持ちや孤独感をもつ。学校は行かなければならないものではなく、自身の成長に必要な手段の1つであることを伝えていく必要があるが、保護者に学校再登校の価値観が根強い。学校から家族関係へと問題は変化し、最終的には自身の特性や考え方へと移行していく。「多様な教育を選択できる」という概念を啓発していくことが課題である。さらには子どもへの教育手法は、集中的に系統性をもって取り組む時期と総合的、包括的な視点で地域課題に取り組み問題解決力を高める時間と自分のスキルや好きな分野を深める時間を融合した21世紀型の教育を学校外のフリースクールが先行して実現することで、子どもの選択肢としての実現性を上げる必要がある。</p>		<p data-bbox="2033 1598 2214 1667">この1年間の活動を通じて</p> <p data-bbox="2226 1583 2644 1684">不登校に関わる支援機関との連携が強化され、初期、中期、長期不登校の子どもへ総合的な支援の実施</p> <p data-bbox="2659 1614 2831 1646">を達成しました。</p> <p data-bbox="2033 1751 2451 1782">■ 受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <p data-bbox="2033 1829 2846 1971">不登校になったことで自分や周りを責めていた子どもが笑顔を取り戻し、様々なことへ意欲を取り戻していくことができました。子ども一人ひとりと向き合う余裕がない世の中でフリースクールという場所が子どもたちにとって最後の安心できる場になっていると感じています。</p>	